

令和3年第16回教育委員会会議（定例会）録

1 日時

令和3年10月11日（月）13時15分

2 場所

教育委員会会議室

3 出席者

教育長：星子明夫

委員：町孝、原志津子、武部愛子、西村早苗、徳成晃隆

事務局：深堀理事

今村総務部長、福田職員部長、竹中教育環境部長、梶原教育支援部長、
木下指導部長

柴田総務課長、立山服務指導課長、宮原教職員第1課長、中松教育環境
課長、山下生涯学習課長、齊藤学校企画課長、井上小学校教育課長、松
行高校教育課長

三浦学校企画課学校企画第1係長

4 会議事項

(1) 付議事項

付議案第60号 福岡市公民館条例の一部を改正する条例の施行期日を定める規
則案

付議案第61号 附属機関委員の人事について

付議案第62号 令和3年度福岡市教育委員会表彰について

付議案第63号 職員の人事について

(2) 協議・報告事項

協議・報告ア 令和3年度全国学力・学習状況調査の結果について

協議・報告イ 令和4年度福岡市立学校教員採用候補者選考試験実施状況につ
いて

協議・報告ウ 令和4年度福岡市立高等学校特色化選抜内定者上限人数につ
いて

5 開会

教育長開会を宣告 13時15分

付議案第61号及び第63号並びに協議・報告イは人事に関する案件のため、付議案第62号は表彰に関する案件のため、協議・報告ウは意思形成過程の案件のため、議決により非公開とされた。

6 付議事項

▼付議案第60号 福岡市公民館条例の一部を改正する条例の施行期日を定める規則案

山下課長より説明

《原案どおり可決》

[質疑等]

(町委員)

○ 柏原公民館はいつ開設か。

(山下課長)

○ 平成4年である。

▼付議案第61号 附属機関委員の人事について

中松課長より説明

《原案どおり可決》

▼付議案第62号 令和3年度福岡市教育委員会表彰について

柴田課長より説明

《原案どおり可決》

▼付議案第63号 職員の人事について

立山課長より説明

《原案どおり可決》

7 協議・報告事項

▼協議・報告ア 令和3年度全国学力・学習状況調査の結果について

齊藤課長より説明

[質疑等]

(町委員)

○ 毎年全国の中で福岡市がどの位置にあるのか興味をもっていて、私なりに順位をつけている。今回してみると、福岡県よりも福岡市の点数が低かったのはどうなのかということ、実は北九州市は福岡市より悪いが、それなのに何故福岡県が福岡市より点数が良かったのか、もちろん中学校は福岡市の方が良いが、その点について疑問であるということ、また、全国的にみると石川県や福井県など北陸

勢は毎年上位にきており、秋田県もそうであるが、私が思うに事前にある程度1、2回同じようなことをさせているのではないかという気がしてならない。東京都は小学校も中学校もそうだが、全国的にみると順位が高く、小学校でいうと全体の9.5パーセント程度のウエイトを占めており、中学校も7.7パーセント程度あるので、東京都の点数が高いため全国平均点数が上がっている。一喜一憂する必要はないが、そういった点も含めてマスコミは興味深く見るので、いろいろな面で対策していかなければならないが、課長が述べられたように、資料44ページ、45ページにあるが、学校単位で落とし込んでいただけてやっていただければと思う。もう一点、中学校の点数が良かった学年は、小学校の時から良かったのか。

(齊藤課長)

- まず、福岡県の取組みについてであるが、福岡県よりも福岡市の点数が低かったことは事務局としても大きなことと受け止めている。福岡県は広域なので各地域によって地区間格差が多いということで苦慮されており、その格差を埋めるべく、全地域に過去の全国学力状況調査の問題のやり直しを徹底して行っているということを知っている。1年ではなく数年に渡って、これはテストの点数を上げるためというよりも全国学力状況調査のような問題に慣れさせる、そういった問題の形式にしっかり対応できるような学力をつけていくということに注力されていた。福岡県は年々少しずつではあるが学力が全体的になだらかに上がってきており、その状況の中での今年度であった。そういった取組みはしっかり我々も学びながら取り組んでいきたいと考えている。石川県その他上位の学校についても同様の取組みをしているということは話に聞いている。これも参考にしていきたい。また、中学校の点数が良かった学年については、ご指摘のとおり、小学校の時にも全国平均をかなり上回る結果となり、児童の母集団の実態として学力の高い集団であるということは否めない。

(町委員)

- そういった点からすると、今の小学生が中学生になったときの調査はあまり期待できない結果になりそうなので、対策も含めてやっておく必要があると思う。また、資料35ページのICTを活用した学習状況については、今のところ良い結果になっているので有効に活用していただきたいと思う。

(徳成委員)

- 福岡県全体の中での地域間格差が激しく、特に福岡市周辺部が非常に高かったが、厳しかった地域がかなり底上げをしてきたと考える。福岡市内をみると、やはり地域間格差、学校格差があり、家庭の経済力の課題や家庭環境の違い、地域環境の違いがあることから、学力学習等調査結果に反映されると考える。それぞれの学校が課題に応じた取組みを続けてきているところだが、特に近年、こういう学校のこういう取組みが効果をあげているという特異な事例があればお聞かせいただきたい。やはり、小学校はテスト問題に慣れていないというのは事実で、

いかに慣れさせるのかということから、全国的に過去問題に取り組ませるといった経過があるようだが、果たしてそういったことばかりさせることが学力総体として良いのかという問題が一方である。中学校はテストを積み重ねてテスト慣れして結果が高くなったということも考えられるが、小学校については無回答が多いということも課題としてあり、今後どう解決していくのかということから、冒頭に質問した何か特に評価できるような取り組みがあれば紹介していただきたい。

(齊藤課長)

- 少し前になるが、東区のある学校について、毎年福岡市の小学校の中でも努力を要する群に居続けていたが、その学校は、まず教員らに授業力向上のための自主勉強会を開き始め、若手を中心に授業力向上の研修を、1年間通して週に1回程度やり続け、最終的には学校全体を巻き込んでその教員にしかできない授業ではなく学校全体で取り組む学習スタイルのようなものを作り上げていき、3年後には、4段階評価でずっと4だったのが2まで上がったということがあった。もう一例あげると、博多区の小学校であるが、ある教員が異動してきて、1年間の学習指導により、4年生をもって5年生での結果であるが、4から1に上がったということがあった。やはり、指導力というのは大きく影響するのではないかと考えている。

(徳成委員)

- 子どもたちの意欲をどう高めていくのか、学級経営と学習指導力が大きな影響力を及ぼすということであるが、そういった事例を今後さらに広めていただきたいということと、各学校が自分たちの課題をしっかりと捉えながら新たなチャレンジをしていただくことが大事だと考える。一方で、国語について、考えを書くということが課題としてあげられている。私は就学前教育に携わっているが、就学前の語彙力の違い、語彙の獲得というのがアメリカでも研究が進められていて、保幼小接続の取組みを重視していかなければならないと考える。

別の質問だが、ICTについては福岡市が今後の可能性を秘めているということが分かったが、文部科学省のホームページをみると、MEXCBTやCBT、いわゆるコンピューターを使ったテストであるが、今後はペーパーレスのテストに移行していくと思うが、そのあたりを想定した取組みや準備が始まっていたら教えていただきたい。

(齊藤課長)

- CBTについては、今年度より福岡市独自で行ってきた福岡市定着度調査、生活習慣調査の二つをCBTに向けた取組みの一つとして、1人1台端末のフォームを使って行っている。これによって、従来のような学校で集計して、採点して、業者委託してといった手間がなくなり、子どもたちが回答したものが一括して教育委員会で集約できるようになり、これから活用の幅が広がっていくことを想定

して実行しているところである。また、C B T化することによって、年に1回だった調査が、今年度、定着度は4回、生活習慣は3回と複数回行うことができるようになった。それにより、年度内の動き、経過を追っていけるので、リアルタイムにタイミングよく変化のあった学校に指導することができ、今年度から取り組んでいる。

(徳成委員)

- 福岡TSUNAGARU Cloudについて、福岡市の先生方が頑張って作り上げてきたのは素晴らしいと思う。M E X C B Tについて、日本中の学校が参画していくことになると思うが、こちらとの関係性はどうなっているのか。

(三浦係長)

- M E X C B Tについては、今年度、試行として使うことができるようになっており、現在、小学校1校が試しているところである。今後、国のI C T、G I G Aスクール構想の進み具合など、いろいろなプラットフォームがどのように整備されていくかによって、福岡市としてもどのように国のものと調整していくかということを検討していく必要があると考えている。

(原委員)

- 一番気になっているのは小学校の国語であり、数字をみていると資料10ページでも、「国語の勉強は好きですか」、「国語の勉強は大切だと思いますか」、「国語の授業の内容はよく分かりますか」といったところが低くなっているし、資料30ページにあるとおり、無回答率が小学校の国語で高くなっており、先ほど記述についても力を入れられるということであったが、問題をみていると複雑な条件を理解したり情報を読み込んだりすることが弱いという指摘もあって、具体的に、小学校の国語の底上げについて、どのように考えているのか。

(齊藤課長)

- 国語については、語彙力が乏しいということが分析の中でも一つの要因であると考えている。どこから語彙力の不足がくるのかということについては、幼少時の経験なども大きいと思うが、一つは、本に親しむ、読書量ということも影響しているのではないかと考えている。したがって、図書館教育や普段の本との親しみ方といったところも学校に指導していく部分、いろいろな提供ができる部分を考えていきたいと思っている。もう一点、実際の授業について、授業の在り方、仕方についても問題があるのではないかと考えている。特に、物語や昔の小説といったものを読む授業では、教員らも意欲的にされているということは承知しているが、説明文やいろいろな条件を満たしてその構成を考えたり表現したりする指導が弱かったのではないかと分析もしている。したがって、説明文やそういった部分の単元の重点化というのも一つ考えていきたい。

(武部委員)

- 国語について、語彙力の問題を述べられていたが、私がいろいろな子どもたち

と関わる時に、具体的な単語は出てくるが概念的な言葉は出てこない、「ネギを買いに行った」とは言えるが「買い物に行った」とは言えないというような、取りまとめて話すということが苦手で、日常生活から引っ張ってくる自身の経験しか語れないという子どもが増えているということを感じる。また、二次的な言葉、いわゆる一問一答の多すぎさ、聞けば必ず答えてくれるが、聞かないと答えられない、話せないという、丁寧な質問をたくさん入れることによって聞かれた事だけに答えるというような習慣があって、思っていることを文章にして最初から最後まで説明するという力も落ちている気がする。このあたりが記述式の問題で固まってしまいうところ、聞かれていないので考えられない、取りまとめられないというところを感じるところである。具体的な先生との日常的な関りも含めてやっていただけると良いと思う。発達的には6歳で、小学校に上がるまでに一時的言葉から二次的言葉に移行していく予定なので、そのあたりも確認していただいて、やり取りの中から力をつけていくことができるような日常があると良いと思う。福岡県の結果をどうするかということについて、各市町村によって差があるからこれを平均化している県の数値は今一つどう捉えるかというところがあって、今回高い点の取れた学校、町、市があったのではという感じもしているが、気になるところではあるので、計画的にやっていただければと思う。

(原委員)

- 国語について、子どもたちの興味、関心を引くようなやり方、前向き積極的にしていけるようなやり方をしていただきたいというのが一つと、これはお尋ねだが、資料44ページに「今後、各学校において、児童生徒が『分かる授業』を実施することはもちろんのこと、児童生徒が『分かっているか』を適宜確かめながら、児童生徒の理解度に応じて適切に補充学習を実施する」とあるが、こういったものについてICTを使って行うことは考えているのか、現状でそういった取組みがなされているのか。

(齊藤課長)

- 先ほど申し上げた定着度調査を年間4回行うということ、今までは年間1回であったので、今まで学習してきたことを一気に調査する感じであったが、今回は4回に分けているので、現在進行中の学習の状況もこの時点で把握することができる。いくら授業が終わった直後、教員が作った問題ができていても、定着度調査で本当にできていたかということ客観的に認識することができる。そこで、できていないということ、ICTを使うと我々よりもまず本人が分かるので、本人が、ここができていないということをつかんだ上で、未来シードやドリルを使ってどこを重点的に補充していけばよいのかということ本人が見つけて本人が考えるということ、全学校でできるような仕組みを作っていきたい。現在、そういうことで補充学習は動いているが、まだ徹底されていない部分があるので、徹底していきたいと考えている。

(原委員)

- それは定着度調査もあるが、日常的なかたちでやっていくような仕組み考えているのか。

(齊藤課長)

- 毎日授業が進んでいくので、その中では担任が、児童生徒の学習状況をしっかり把握する必要があると考えている。それを小テストで実施するのか、定期的なアンケートで実施するのかというのは検討していきたいが、日常の授業の中では、教員らはしなければならないことと認識している。

(木下部長)

- 授業の評価に係るところになるが、小学校、中学校を比べていくと、中学校は日々の授業の中で生徒が教員の授業の在り方などを評価する機会はあるが、小学校はなかなかそこまでいかないという現状がある。ICTを使うことによって、授業が終わった後にグーグルフォームを児童生徒に送って、その場でアンケートをとって日々の児童生徒の理解度、「楽しかったですか」、「分かりましたか」といったことを問うことができる。そういった児童生徒による授業の評価のようなものを毎時間はとれないかもしれないが、例えば定期的にとる、国語の強化を重点的にとる、あるいは課題のある学校に指導主事が行ってそういったやり方を勧めていきながら日々の授業における児童生徒の変容を把握して進める取組みをしていくことによって、今、全国に比べて授業の内容が分かりますか、意欲的にしていますかといったことが通年低い状況にあるので、そこのところをしっかりと取り組んでいきたい。そのためにも、ようやく学校訪問をできるようになったので、指導主事たちが力を入れていきたい学校には重点的に行って取り組んでいかなければならないと考えている。

(西村委員)

- 国語、算数の図形の点数が低下していることが心配なところではあるが、特に気になるのは、依然として無回答率が高いということは学習の意欲のなさにも繋がっていると思うので心配である。分からなくても回答するような意欲が上がってくれたら良いと思う。無回答率に対して取り組んでいることがあれば教えていただきたい。

(齊藤課長)

- テストの受け方について、これが受検である場合は何か書くよう、特に選択問題であればどれか選べば当たる可能性があるのだからといったテクニックを我々も学んできたと思うが、今回、無回答率の分析の中で大切にしたいのは、最初から諦めて何も書かない、もしくは多分これではないかと思うが間違ったら恥ずかしいから書かない、自信がないから書かないといういろいろあるとは思いますが、何らかの自分なりの回答を見つける、何らかの答えを自分なりに作ることの大切さ、これは普段の授業の中で誤答、間違いをいかに大切にしていけるかというところに繋

がっていくと思う。そこで、具体的な指導に入る各学校には、それぞれ子どもたちが間違っているだとか合っているだとかいう以前に、自分の考えを持つ、こうではないかなと考えることを大切にしていきたい、そのような授業を指導していきたいと考えている。

(町委員)

○ 中学校の数学は政令指定都市の中では第1位で、国語は第4位、小学校は国語が15位、算数が12位ということで、小学校は課題がある気がするが、中学校の数学は第1位だったということで誇りに思っているのではないかなと思う。今からは是非お願いしたいのは、徳成委員もおっしゃっていたように、児童生徒の質問用紙に対する対策、学校側の教員も含めてのやり方などは今後頑張ってもらいたい。先ほど、ICTを使用したテストはどうなるかといったご質問があったと思うが、PISA調査の大人版が5、6年前に放送されたことがあったが、日本は世界で第1位であった。ただし、ICTを使った回答率は低い方から1番目か2番目であった。回答そのものは高かったがICTを使った部分では先進国の中でも遅れていた。今後は、そういった部分も含めてICTをいかに活用するか、また、そういった試験をできるような施策も考えていく必要があると思う。

▼協議・報告イ 令和4年度福岡市立学校教員候補者選考試験実施状況について
宮原課長より説明

▼協議・報告ウ 令和4年度福岡市立高等学校特色化選抜内定者上限人数について
松行課長より説明

8 閉会

教育長閉会を宣告 15時01分